

ひまわりからの

メッセージ

2011. 4. 12.

西濃圏域
発達支援センター
ひまわり

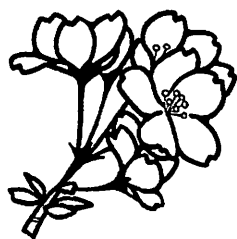
発行人：中野みづ子

春・新になる出発です。

私が「西濃圏域発達支援がい見療育地域支援センター」(通称・西濃圏域発達支援センター・ひまわり)の専門支援員を引き受けて四年目を迎えました。昨年まで三十二年間を過ぎたひまわり学園の業務を退き、今年度からは、センター業務に専念することになり、連携という立場から、大垣市社会福祉課の発達支援担当や、西濃圏域専門外来のいかわりニックの心理士など、色々なところで関わっていくことにもなっています。学園時代よりも広く動き回ることになりました。

とりあえず、「はじめまして。」

どうぞよろしく。o.O



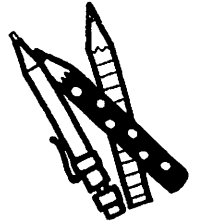
さて、東日本大震災から一ヶ月が経ちました。いまだに行方不明の方々も多く、テレビが日々伝える映像に、私たちに一体何ができるのか……と心痛む毎日です。

私はあの地震の時、N小学校の二階に居て、揺れのおさまるのを待ちましたが、まさか東北であのような惨事が起きるというとは、思ってもいませんでした。地震の後、発達障がいのお子さんたちの様子はなかなか伝わってきませんでした。が、厚労省は支援のための通達を出し、避難所生活になじめない子どもたちの支援を呼びかけていました。

見通しがたたないこと、不意のできごとによる不適応をおこしてしまう子どもたちに対する防災のそなえについて、私たちは余りにも無知ではないでしょうか。もちろん被害に遭われた方々全てが支えを必要とされていますが、ことはで説明しても理解がむづかしい子ども達は、きっとパニックをおこしているだろうと思うと、ここでこうしている自分がいたたまれなくなってきました。

今年も学園の桜が満開です。精一杯咲く花を見上げながら、私たちも自然の一員として、今、自分にできることを精一杯やることしかないので……と思っています。

「療育」から自立へ……



「療育」ということは使われるようになったのは、最初は「肢体不自由のお子さんに対して」「治療・教育」という意味合いで使われ始めたと思いますが、いつのまにかひまわり学園のような児童デイサービス事業施設でも使われるようになってきました。「早期発見・早期療育」というキャッチフレーズで、子どもたちの発達を早期から支えていこうという流れの中で、療育ということばは定着していったと思います。

以前、療育の場では、小集団指導が行われていましたが、個別支援という考え方が入ってきて、個別支援こそが全てであるという流れが出来上がっていました。大人と子どもの一対一の関係の中で、大人が子どもに寄り添い、受容していくことこそが療育であるという考え方です。一方、集団活動の場である保育園、幼稚園では自由保育がもてはやされ、子どもの自主性を尊重し、子どもの興味のある遊びを通して友達とのかかわりや遊びの広がりが増えていくという視点で子どもたちを受け止めていくことになりました。

けれども、発達特性をもつ子どもたちにとっては、個別療育の中での完全受容や、自由保育の中での遊びは、残念ながら彼らの社会性を広げることにはならなかったのです。幼児期にかかわる方の中に「大人になったら、そのうちに分かってくる」と無責任な発言をされる方がありますが、大きくなってからでは遅いのです。小さい時から、他人と折り合いをつけることも学んでいけるように、遊びの中でも、日常生活の中でも、意図的に環境を整えていくことが大切であると私は思っています。

個別療育は、本来は、ただ子どもの要求に大人が合わせていくものではなく、相互にやりとりをしながら人と人のかかわりを学んでいく関係であると思いますが、どこかで取れちがいが起きてしまったのでしょうか。

近年、発達障がいということばを聞くことが多くなりました。保育園などの園や学校の集団活動になじめず、困っている子どもたちが増えてきている現実があり、その子どもたちの発達特性が次第に明らかになってきました。そして、集団の中でどのように行動していけばいいのかを学ぶためには、その子どもたち一人ひとりとって、今必要なことは何なのかを明らかにし、個別、小集団、大集団という設定がなされな

ければならないこともわかってきました。

療育の中味が再検討されなければならない時期とも言えるでしょうし、保育園などにおける「遊び」についても見直しが迫られていると思います。

私のセンターでの仕事は、一つには、親の会を通して、お母さんたちに自分のお子さんの特性を知っていただくこと、そして、どの様に育てていったらいいのかを一緒に考えること、二つ目は、様々な機関をつないで、お子さんも今後ずっと途切れなく支援していくシステムを作っていくことだと思っています。

「発達障がい」ということばに異和感をおぼえる方も多いと思いますが、むしろ発達の特性とか不安定さといったところをえ方としていただいてもいいのではないかと思います。耳で聞くことよりも目で見る視覚情報の方が入りやすいという子もいますが、逆に目で物をとらえる力の弱い子もあります。私たちは様々な情報や刺激を自分の中に取り入れ、自分なりに処理をしていきます。しかし、情報の入り方が他の人たちとちがっていた場合に混乱するのはその子自身です。

子どもたちのことをもっとよく知りましょう。

お母さんの家庭でのしつけがなされていらないから、子どもさんが不適応をおこしているのでは決してないのです。

もっと子どもたちのことをよく知って、その子に適した支援をしていくことで、子どもたちの混乱は是正されていくのです。

幼児期に ことばが遅かったり、友だちとよくトラブルを起したり、よく動き回ったり……お母さんを悩ませることがあっても、小さくてかわいくて、ちよっとわがままな子という位に思っていることが多かったのだろつと思えます。幼児期の遊びの中では、特に心配することもないかったかもしれません。保育園で、お友だちとうまく遊べなくても、加配でついでくれた保育士さんがかばってくれて、お母さんにとっては、学校でも支援員さえつけてもらえればうまくいくという思いにさせてくれたかもしれません。

でも、学校に入って、友だちとうまくかかわることができず、思ったままを口に出して言うことで、他の子からいじめられ、疎んじられたり授業についていけないかったりすると、子どもたちの困り感是不登校や反抗、

家庭での暴力といったかたちにエスカレートしてくることもあります。

プライドが高く、完全主義の子であれば、自己肯定感が失われてくることで、自分でもどうしていいのかわからずに、リストカットなどをくり返すようになってしまいかもしれません。

私たちは、子どもたちを守っていかねければなりません。そのためには、子どもたちのことをよく知っていないと、子どもを支えていくことはできません。

センター親の会を毎月第二火曜日の午前九時から始めることにしたのは、お母さん自身も、そして私も共に学んでいく機会を作りたかったからです。

子どもたちは、いつまでも幼児のままではなく、すぐに大きくなります。大きくなった時、自分の好き勝手にしている人を雇用してくれる企業はありません!!

子どもたちの自立に向けて、今、私たちがやらねばならないことを一緒に探っていきましょう。仲間もたくさんいます。今、真剣に考えていくことが、子どもたちを守り

自立につなげていくことになるのだと思うのです。

お知らせ

① 親の会は第二火曜日 九時～十一時
四月十二日は 防災について考えます。

② 「ひまわりからのメッセージ」は、パソコンで検索するとバックナンバーが出てきます。Q & A コーナーもありますのでご利用ください。

③ センターだよりは、お母さん向けに発行していきませんが、幼児期の問題と、就学後のコーナーを分けて次回から掲載していく予定です。

④ 中野は、常に学園にいるとは限りませんが、学園に連絡いただければこちらから連絡します。緊急の折には、その旨伝言して下さい。

